

琉球王国の世界遺産

価値がみとめられた 沖縄の世界遺産

2000年12月、沖縄の9つの文化遺産が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として、世界遺産に登録されました。

グスクとは城のことですが、もともとは聖地やお墓、石垣などで囲った集落などをグスクとよんでいました。このグスクの独特な城壁や、そのほかにも景観のすぐれた庭園、精神文化を伝える御嶽や陵墓（王家の墓）の価値が、人類共有の文化遺産としてみとめられたのです。

9つの世界文化遺産

首里城のある那覇を中心に、沖縄島の南部、中部、北部に点在しています。



©OCVB

今帰仁城跡



沖縄島北部の本部半島にあり、13世紀ごろに築かれたとされています。三山時代の山北（北山）王の居城で、古期石灰岩のけわしい岩山の上にあります。延長1500mにおよぶ城壁は、起伏に富んだ地形に沿って美しい曲線をえがいています。1416年に尚巴志の中山軍に滅ぼされました。

座喜味城跡



1420年代に有力な按司（1巻）であった護佐丸によって築られました。その役割は、今帰仁城が滅ぼされたあとの沖縄島中北部に残った、旧・北山勢力を監視することで、首里城からよく見える丘の上に建てられています。城壁の石積みに高い技術が見られ、アーチ状の門には、くさび（物と物の間に差しこんで、すきまをなくす道具）が用いられています。



©OCVB



勝連城跡



沖縄島中部の東海岸に位置する勝連半島にあり、土地の高低差を生かして造られています。築城は13世紀前後とされ、15世紀には、この時代の有力者で、海外交易で繁栄した阿麻和利が城主となりました。城内では、舎殿跡や御嶽（神をまつる場所）も見ることができます。1458年、首里王府に滅ぼされました。

(写真提供：うるま市教育委員会)

中城城跡



沖縄島中部の中城湾に面した高台にあります。造られた時期は不明ですが、15世紀半ばに、首里王府の命で座喜味城から移ってきた護佐丸によって拡張されました。勝連城の阿麻和利を監視することが目的でしたが、1458年に阿麻和利の策略で滅ぼされました。1853年にペリー艦隊の調査隊がこの地をおとずれ、築城技術の高さを賞賛しています。



©OCVB

沖縄の伝統工芸

中国や朝鮮、日本などの技術を取り入れ発展

沖縄の伝統工芸は、琉球王国時代、中国をはじめ朝鮮、日本や東南アジアの国ぐにとの交易を通じて伝わった技術をもとに、琉球の風土に合わせて発展してきました。漆器や焼物、染織物など、それぞれの地域ごとに特徴のある伝統工芸が受けつがれています。沖縄の舞踊や音楽に欠かせない三線も、伝統工芸品のひとつです。

高い技術をほこる琉球漆器

「漆器」とは、うるしをぬって仕上げられる器のことです。なかでも、沖縄で独自に発展した漆器を「琉球漆器」とよびます。

琉球漆器は、14世紀ごろから首里を中心につくられはじめました。デイゴやシタマギといった沖縄特産の木材を使い、つい錦や沈金といった方法でかざりつけがされます。



©OCVB

つい錦を用いた琉球漆器

つい錦は、中国の技術をもとに沖縄で生み出された独自の手法。うるしと顔料を混ぜ合わせたものをたたいてうすくのばし、これを模様のかたちに切り取って、漆器の表面にはりつけます。

キーワード

伝統的工芸品

全国の工芸品のなかで「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」にもとづき、経済産業大臣の指定を受けたものを「伝統的工芸品」といいます。みとめられるためには、伝統的な材料や技術を用いて、製品のおもな部分を職人が手づくりしていること、地域に根づき、暮らしのなかで使われていることなどの条件を満たす必要があります。沖縄では、琉球びんがた、久米島紬などの13種類の染織物と、壺屋焼、琉球漆器、三線が伝統的工芸品に指定されています(2021年1月現在)。



国宝・朱漆巴紋牡丹沈金馬上盃
琉球の王家・尚家に伝わる酒器。沈金という方法でかざりつけがされています。沈金は、うるしをぬった上から模様をほり、ほったところに金粉をうめこむ技法です。
(所蔵：那覇市歴史博物館)

琉球王国時代に国をあげて生産した焼物

沖縄の言葉で、焼物のことを「ヤチムン」といいます。ヤチムンは、琉球王国時代に、中国や朝鮮など、東アジアの国ぐにの陶磁器の影響を受けながら発展しました。1616年には、薩摩にいた朝鮮人陶工を湧田窯(現在的那覇市泉崎)にまねき、朝鮮の焼物の技法を本格的に学びます。そして、1682年には、琉球王府が各地に分散していた窯場(陶磁器を焼く工房)を現在的那覇市壺屋にまとめ、壺屋としました。これが、沖縄を代表する焼物のひとつ、「壺屋焼」のはじまりとなりました。



壺屋焼の「荒焼」と「上焼」

壺屋焼には、大きく分けて、うわ薬をかけずに焼く「荒焼(写真左)」と、うわ薬をかけて焼く「上焼(写真右)」があります。「荒焼」にはかざりがほとんどなく、おもに食べ物や水、酒を貯蔵するかめや小びんなどとして使われています。一方、「上焼」にはかざりがあり、急須や食器、花瓶などとして使われています。
(所蔵：那覇市壺屋焼物博物館)



読谷やちむんの里の登り窯

戦後、昔ながらの火でたく登り窯にこだわる陶工たちが読谷村へと工房を移しました。こうして工房が集まった地域が、現在「読谷やちむんの里」となっています。



現在も使われているヤチムン

現在は、ふだん使う食器のほか、みやげ物としても人気です。ぽってりと厚みがあり、ぬくもりのある色や模様のもので多く出まわっています。
©OCVB

コラム

味わいのある琉球ガラス

沖縄で器などに使われている色あざやかなガラスを、「琉球ガラス」といいます。沖縄では、明治時代の終わりごろからガラスがつくられるようになりました。その後、昭和時代に空きびんを利用して色つきのガラス製品をつくるようになると、これが琉球ガラスとして広まっていきました。



気泡が特徴的

あざやかな色とともに、ガラスの中に小さな気泡があるのも特徴のひとつです。
©OCVB

琉球・沖縄の伝統行事

沖縄では、一年を通して先祖をまつり、豊作や豊漁を祈るさまざまな行事があります。これらは、旧暦に沿っておこなわれています。

時期 (旧暦)	行事名	行事の内容
1月1日 (新暦の2月上旬ごろ)	ソーグウチ (正月)	元日の朝に、若水(きれいな水)をくんでお茶をいれて神仏に供え、年始まわりをします。
1月4日 (新暦の2月上旬ごろ)	ヒヌカンウンケー (火の神迎え)	年末に天界に帰った火の神を迎えます。
1月 吉日	トゥシビー (生年祝い)	数え年で干支の年の人(13歳、25歳、37歳、49歳、61歳、73歳、85歳)の健康を祈ってお祝いをします。
1月16日 (新暦の2月中旬ごろ)	ジュウルクニチ (十六日)	後生(死後の世界)の正月とされ、先祖のお墓参りをします。
1月20日 (新暦の2月下旬ごろ)	ハチカソーグウチ (二十日正月)	正月行事の終わり。正月のかざり物をかたづけます。
2月15日 (新暦の3月中旬ごろ)	二月ウマチー (麦穂祭)	麦の豊作を祈り、神仏にお酒を供えます。
3月3日 (新暦の4月上旬ごろ)	ハマウリ (浜下り)	女の子の節句。近くの浜辺で手足を潮水にひたして身を清め、遊びます。
3月15日 (新暦の4月中旬ごろ)	三月ウマチー (麦大祭)	麦の収穫に感謝し、神仏に初穂とお酒を供えます。
3月 清明の節 (新暦の4月上旬～ 5月上旬ごろ)	シーミー (清明祭)	家族や親せきがお墓に集まり、そうじをして、ご先祖とともに食事をします。
5月4日 (新暦の6月上旬ごろ)	ユッカヌヒー	各地で漁船による競争、ハーリー(→13ページ)をおこない、豊漁や航海の安全を祈願します。
5月5日 (新暦の6月上旬ごろ)	グングウチグニチー (端午の節句)	男の子の節句。成長と健康を祈り、あまいおかしと菖蒲を仏前に供えます。
5月15日 (新暦の6月中旬ごろ)	五月ウマチー (稲穂祭)	稲の豊作を祈り、神仏にお酒を供えます。



中身汁
豚の内臓(中身)やしいたけ、こんにやくなどが入った汁物をお祝いの席で食べます。



シーミーの様子
沖縄のお墓はとても広く、親せきみんなが集まることができます。

(写真提供・沖縄タイムス社)



フチャギ
餅にあずきをまぶしてつくります。



カジマヤーの様子
風車を持ってパレードします。

(写真提供・琉球村)

時期 (旧暦)	行事名	行事の内容
6月15日 (新暦の7月中旬ごろ)	六月ウマチー (稲大祭)	稲の収穫に感謝し、神仏に初穂とお酒を供えます。
6月26日 (新暦の7月中旬ごろ) ※地域によっては8月	おおつな 大綱引き	勝負で豊作の吉凶をうらない、豊作を祈願します。那覇大綱挽(→12ページ)や糸満大綱引、与那原大綱曳が有名です。
7月7日 (新暦の8月上旬ごろ)	タナバタ (七夕)	お盆に備え、お墓をそうじし、衣類の虫干しをします。
7月13～15日 (新暦の8月中旬 ～9月上旬ごろ)	シチグウチ (旧盆)	13日の夕方、門の前で松明をたいて先祖の盃をむかえ入れ、親族で慰霊し、15日の夜に送り出します。この期間にエイサー(→16ページ)がおこなわれます。
8月8日 (新暦の9月上旬ごろ)	トーカチ (米寿)	数え年で88歳になった人の長寿のお祝い。トーカチ(穀物をますではかるときに使う棒)に、赤い紙をはってかざります。
8月15日 (新暦の9月中旬 ～下旬ごろ)	ジューグヤ (十五夜)	豊作を祈り、フチャギという餅を神仏に供えます。
9月7日 (新暦の10月上旬ごろ)	カジマヤー	数え年で97歳になった人の長寿のお祝い。「カジマヤー」は風車のこと、人生が風車のようにまわり、97歳で子どもにもどることを意味します。
10月 吉日 (新暦の10～11月ごろ)	タナドゥイ (種取祭)	稲や粟の種をまき、豊作を祈願します。宮古・八重山では村芝居をするなど大きな祭りをもよおします。
11月 冬至 (新暦の12月中旬 ～下旬ごろ)	トゥンジー (冬至)	田いもが入った味つけごはん「トゥンジージュージー」をつくり、神仏にお供えます。田いもは里いもの仲間、沖縄の島野菜のひとつです。
12月8日 (新暦の1月上旬ごろ)	ムーチー (鬼餅)	サンニン(ゲットウ)という植物の葉に包んで蒸した餅を子どもに食べさせ、健康を祈願します。
12月24日 (新暦の1月下旬ごろ)	ウガンブトゥチ (御願解き)	火の神を天に送り出します。
12月30日 (新暦の1月下旬ごろ)	トゥシヌル (大晦日)	ソーキ汁(豚のろっ骨の汁)をつくって食べ、年を越します。



ムーチー
餅に白ごとうや黒糖、紅イモで味つけをします。

※旧暦…月の満ち欠けをもとにした暦(太陰太陽暦)。1872年に太陽の動きを基準にする太陽暦(新暦)に変わりました。
※数え年…生まれた年を1歳とする年齢の数え方です。